

究教育がますますの成果につながるよう期待しながら、私もそれに負けない研究成果を上げたい

のと念じております。

長い間ありがとうございました。

岩槻邦男先生を送る

加藤 雅 啓 (植物園)

岩槻先生は1981年4月、当時の京都大学理学部教授から本学理学部附属植物園教授併任、1983年4月同専任になられた。それ以後12年間で植物園長を4期のべ10年務められたので、ほとんどの在職期間、園長という重職を担ってこられたことになる。当初から研究室の充実に力を注がれ、主要設備備品を整えられたおかげで、私たちは恵まれた条件で研究を行うことができた。また、助教ポストの純増を実現され、研究の陣容を拡大された。そればかりでなく、植物園さらに理学部の職員とくに技術官の待遇改善に尽くされ、また職場環境の改善充実を図られた。とくに、理学部のご支援を得ながら実現した研究温室と園内環境整備は植物園での研究ならびに植物育成の環境を飛躍的に改善するものであった。これらはいずれも植物園で研究し働く私たちにとって大変ありがたいことであった。長年にわたって植物園の発展に尽くしていただいたことに改めて感謝いたします。

岩槻先生はこのように「みんなに尽くす」タイプの方である。それはもちろんご自身が置かれたお立場と責任を全うされたことを意味するものである。1992年10月から2年間は評議員として学全的なお立場からご尽力された、「みんなに尽くす」ご努力は学界でも続けられた。日本植物学会、日本植物分類学会の両会長、日本植物園協会会長、国際植物園連合会長、国際生物科学連合日本代表、第15回国際植物科学会議組織委員会総務委員長などの重責を精力的にこなされた。これらの多くは同じ時期であり、私たちの眼には超人的なお働きとして映った。

このような岩槻先生のご献身さを支えているものは一体何なのだろうかと考えたことがある。人一倍強い責任感をもっておられることはいうまでもないが、そこまでしなくてもと思うほど人の長所を評価されるひとの良さと、相当困難な事柄でも何とかなると引き受けられる楽観論者であることが私が得た結論である。見習いたい、ととてもまねのできるものではない。

さて、先生は昨年6月日本学士院エジンバラ公賞を受賞された。その喜びを分けていただいたのは、一緒に研究させていただき弟子の一人である者として光栄であった。受賞研究は「植物の多様性の解析およびその滅失に関する保全生物学的研究」である。まことに先生のご活躍にふさわしい受賞であった。ところで、今日「生物多様性」という言葉が研究者の間だけでなく一般社会でも普通に使われていることに関してあまり知られていない点に、先生の近くに長くいた1人としてちょっと触れておきたい。それは先生が生物多様性の研究で世界的に高い評価を受けられただけでなく、その重要性をわが国で他分野の研究者からも理解が得られるようにと、ずっと前から長く根気強く訴えてこられたことである。「生物多様性」とその研究の認知に腐心されたそのご努力が近頃の「生物多様性」の定着、さらには生物科学専攻での進化多様性大講座の実現につながったと私は見ている。「生物多様性」がいかにか先生のご研究の核心であったかは、最近書かれた教科書の題名が「多様性の生物学」であり、最終講義の演題が「植物の種多様性を究める」であったことが

らも十分窺い知れる。

岩槻先生はこの4月から立教大学に移られて研究を続けられる。ご自身はこれを機会に「みんなに尽くす」任務を軽減して、できるだけ研究に専心するというご希望をおもちのようだ。そのよう

になるのか、あるいはこれまでのように先生のお力を必要とすることが続くのだろうか。いずれにしても、岩槻先生がますますお元気でご活躍されることをお祈り申し上げたい。長い間ありがとうございました。

